富について

馬　田　哲　次

I　富の理論の必要性

経済学の危機が言われて久しい。新しい経済学への試みも様々である。新しい経済学を考えるときには，富或いは豊かさについての考察を欠くことは出来ない。なぜなら，アダム・スミスが「諸国民の富」の中で，

「政治家または立法者の科学の一部門と考えられる経済学（political œconomy）は，二つの別個の目的をたてているのであって，その第一は，人民に豊富な収入または生活資料を供給すること，つまりいっそう適切にいえば，人民が自分のためにこのような収入または生活資料を自分で調達しうるようにすることであり，第二は，国家すなわち共同社会（state or commonwealth）に，公共の職務を遂行するのに十分な収入を供給することである。経済学は，人民と主権者との双方を富ますことを意図しているのである。」

1）アダム・スミス(1)，p5

と述べているように，[1]経済学の目的は豊かさの追求にあるからである。また人も，大なり小なり，意識的無意識的に豊かさを求めて生きているからである。富とは，人々の行動を根本から規定するものである。貨幣が富の象徴であれば，人々は意識的に貨幣を求めて行動する。環境問題が大きな問題として生じてきているが，貨幣が富である以上，人々が貨幣を求めて行動するのは避けられない。すると，今日のように，生産，消費において自然との関りが無視出来ない社会では，必然的に環境問題が生じてくる。それを解決しようとすれば，様々な規制を設けるしかない。規制が制定されるのは，問題が生じてからのことが多い。従って，問題の根本的な解決にはならない。問題を根本的に解決するためには，富の理論を変えるしかない。

富の理論が新しくなるときは，新しい経済学が生まれるときである。重農主義は農作物を富としたし，重商主義は金を富と見なした。そしてアダム・スミスは，労働生産物のフローを富と見なし，この時点から経済学が大きく変化した。というよりも，このときから経済学が始まったといってもよい。その後，産業革命がおこり現実の経済も大きく変容した。限界革命をおこしたワルラスも富についての考察を行っている。

ケインズの理論が経済学に革命を起こしたに見えたが，新古典派の理論に吸収されたようである。ミクロ的な基礎付けの必要性が言われたとき，新古典派の枠組みに取り込まれてしまった。今では，両者の間に決定的な差はない。こうなった大きな理由の一つは，ケインズが独自の価値論をもっていなかったからである。ミクロ的基礎付けを議論しようとすれば，効用関数の極大化や利潤の極大化で議論するしかない。だから全く別の独自の理論体系を創り出そうとするならば，独自の富の理論や価値の理論が不可欠になる。マルクスは労働価値説の上に壮大な体系を打ちたてた。

現代の主流派の経済学は，富，価値といったものを問わない。価格や失業率，貨幣量，利子率といった観察されるものの動きを説明しようとするだけである。目に見えないもの，直接観察されないものは経済学の対象か

ら外される。科学的客観的に分析するためにはそうしなければならないという。ほんとうにそれでいいか。過去作ったモデルが説明力を失うと，構造変化が起こったという。それはそれでいいのかもしれないが，現象に振り回されているような気がするのは私だけであろうか。

俗に言う価値観の多様化のために，人々が求めるものが漠然として分かりにくく，大きくてしっかりした動きをなしえない。何かのきっかけがあれば，一時的な流行のように，瞬間的に動いていくが，長くは続かない。その度毎に，構造が微妙に変化していくようである。そしてそのゆらぎは予想することは難しい。ほんの偶然的なことでゆらぎが起こるからである。

環境問題は現代の経済が抱えている最大の問題の一つであるが，環境，自然といったものは主流派の経済学では富とはみなされない。それは，ワルラスが定義する富の中には入っていないからである。ワルラスは，富を次のように定義している[2)]。

「物質的または非物質的なもの（ものが物質的であるか非物質的であるかはここでは問題でない）であって稀少なもの，すなわち一方においてわれわれにとって効用があり，他方において限られた量しか獲得できないもののすべてを社会的富と呼ぶ。」

そして，富の性質として次の三つをあげている[3)]。

(1)効用があり量において限られたものは，専有せられる。
(2)効用があり量において限られたものは，価値があり交換することができる。
(3)効用があり量において限られたものは，産業的に生産または増加し得られるものである。

2）レオン・ワルラス(2)，p21
3）レオン・ワルラス(2)，p23，p24

しかしながら，自然環境は基本的にこのような条件を満たさない。そこで，環境汚染は外部不経済，市場の失敗とかで問題にする。環境汚染を問題にするということは，環境を富の一部とみなしていると思われるが，富の定義からははずしている。論理的に矛盾していないのだろうか。

また，人はただ単に物的に満たされているだけでは十分満足することは出来ない。さらに，環境問題を根本的に解決しようとすれば，人の行動を変えるしかない。従って，人間に対する深い理解，とりわけ心理面に関する理解が欠かせない。

II　どんな社会であれ，生産，交換，消費を行う

豊かさを考察する場合，経済活動がどのようになされるかを抜きに考えることは出来ない。そこで，経済活動を総体的に考察することから始める。

我々が生き続けるためには，どんな社会であれ，生産活動と消費行動をしなければならない。狩猟，採集にとどまらず，自然に存在しないものを生産するところに人間の特徴の一つがある。生産物は，自給自足の経済でない限り，交換システムを通して交換される。そして，見過ごしてならないのは，生産活動と消費行動は大なり小なり，自然との関わりの中で営まれるということと，生産過程，交換過程，消費過程は人間によって行われるということである。この二点を現代の経済学が脇に置いているところに，経済学が現実の経済問題を解決出来ない根本的な原因がある。これらの関係を簡単に図示すれば，次の図1のようになろう。

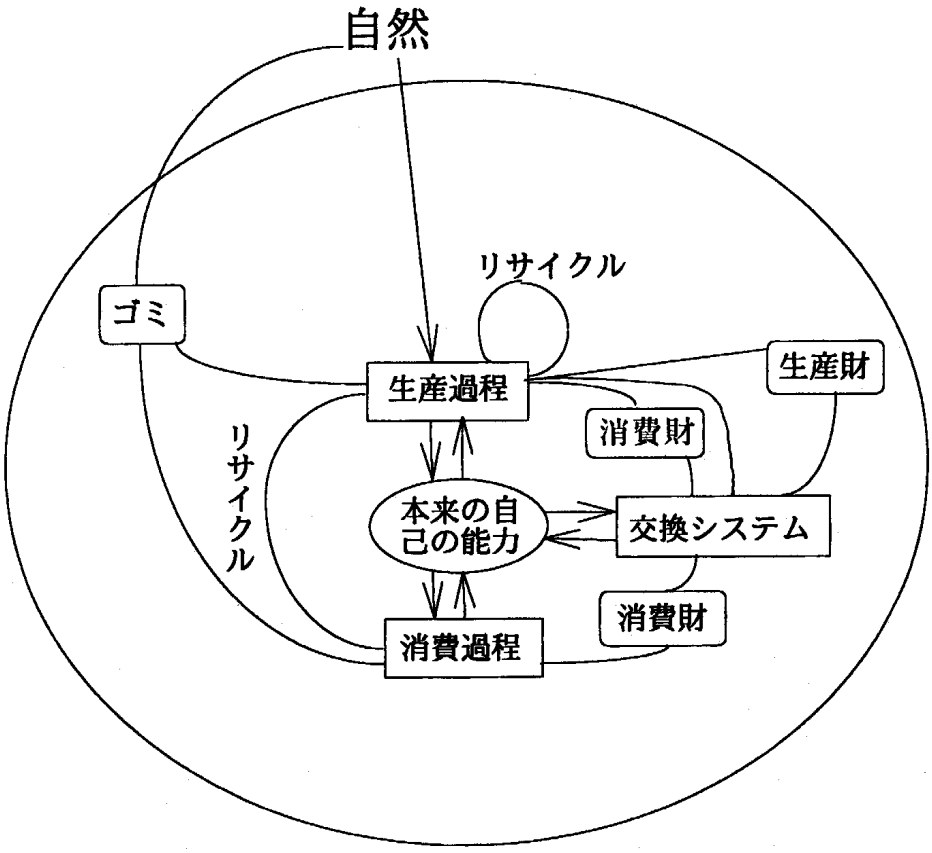

図1

いかなる人間の社会であろうとも，自然の制約を免れることは出来ない。自然を支配し，自然をコントロールすることが出来るという思い上がった西洋合理主義が今地球を危機におとしめているといってもいいかもしれない。一つのことを支配したと思っても，別の所から思いがけない反作用がある。フロンガス然り，ナイル河のアスワンダム・アスワンハイダム然り，MRSA 然り。

だからといって，ただ闇雲に自然は畏れる存在かというとそうではない。大切なのは自然の仕組み，宇宙の法則を正しく知り，その法則に従って生きることである。本来の自己が生きる方向に従って生きることである。そのためには，社会や組織のシステムを，自然の法則や本来の自己の方向性に合ったように創ることである。

生産は，直接・間接に，自然の中からある物質を取り出して，人間がそ

れに手を加えて，人間が利用しやすいように変形する行為である。資本主義社会はそれを賃労働という形態で行う。

生産過程で作られた生産物は，消費されるか投資される。生産物は，自給自足経済であれば生産した人がそのまま消費するわけであるが，現代の経済は自給自足の経済ではない。何らかのシステムを通して，生産物はそれらを必要とする人々，つまり消費する人々の手に渡らなければならない。現代経済では，主として市場を通して貨幣と交換に間接的にものとものとが交換される。この貨幣が豊かさの実現において，プラスの意味でもマイナスの意味でも，大きな意味を持っている。

生産物を購入し消費する。主流派の経済学ではここまでしか問題にしない。生産されたものが過不足なく販売されればそれでよしとする。しかしながら，購入は消費の始めでしかない。豊かさの実現の為には，効用極大と言った購入量の決定よりも，もっと重要な購入量の決定法がある。そして，何を購入するかも重要であるが，購入したものをどう使用し，処分するかということもそれに劣らず重要である。ごみ問題が最も分かりやすい例であろう。

自然から物質（本当は目に見える物に限らないが）をもらい，生産過程，交換過程，消費過程を通して，そしてまた自然に返す。この循環がスムーズに流れれば流れるほど，自然と調和していることを意味する。ごみはこの流れを滞らせる。原子力発電などもってのほかである。

労働過程自体が豊かさの実現には決定的な重要性をもっている。労働そのものが自己本来の労働になっているとき，豊かさが実現されていると言うことが出来る。

III　資本主義社会の生産，交換，消費の特徴

以上述べたように，自給自足の社会を除いて，どの社会でも，生産，交換，消費を行っているのであるが，資本主義社会はそれらをどのような特

徴ある方法でやっているだろうか。まず生産から考察しよう。

生産の第一の特徴は，いわゆる生産の無政府性である。今日の資本主義経済では，政府の生産に対する介入がある程度あるが，資本主義の原則は自由な生産の決定である。何を，どれだけ，どのような方法で生産するかは，基本的に個人の自由に任されている。

生産の決定は，利潤を基準になされる。必ずしも常に利潤が直接的な決定基準になるわけではない。成長率やマーケット・シェアを目標になされることもある。しかしながら，利潤をあげることが出来ないならば，その生産組織体は，存続することが困難である。今日の資本主義社会では公営企業も存在するが，赤字を出し続けると問題になる。

生産を決定するものは，不確実性の下で生産の決定を行う。つまり，生産するものが売れる保証がないまま，売れるという希望的予測の下で生産の決定を行うのである。新製品がどれくらい売れるかは，例え市場調査を行ったとしても，完全に分かる訳ではない。また，販売量が天候に左右されることもある。しかし，売れるかどうかが不確実なのに，敢えて生産を行う人々が存在しない限り，資本主義経済の下では，何も生産されないのである。

このことは，裏を返せば，消費者の希望が製品に完全に反映することはないということである。稀に，原材料選びから消費者の希望通りに生産を行う場合もあるが，そういう場合は，コストがかなり高くなってしまう。自分が本当に気に入った商品でないために，飽きがきてまだ使用出来るのにゴミとして捨てられることになる。

生産は主に，企業組織によってなされる。生産の始めから終わりまで，個人で全て行うのではなく，企業という組織内で分業してなされる。そして，この組織の在り方が，生産の効率，労働の質に大きな影響を及ぼす。

個人の存続よりも，企業体の存続が優先される。人は死んでも法人は死なない。過労死がその典型的な例であろう。

労働は賃労働の形態をとる。資本主義経済の下では，財・サービスを手

に入れるためには,原則として貨幣と交換して手に入れなければならない。そして，貨幣を手に入れるためには，何かを売らなければならないが，何も売るものを持たない労働者は，労働力を売るしかない。売るか売らないか自由に決定出来るのではなく，売らざるをえないのである。そして，労働の決定権は，基本的に企業家が持っている。つまり，決められた労働を労働者が，企業家の要求通りに行うことが出来なければ，労働者はクビになるために，要求通りの労働を行うしかない。

以上が資本主義経済の生産の特徴である。次に，交換の特徴について述べる。

交換の最大の特徴は，市場で貨幣と交換に財・サービスの交換がなされることである。生産されたものは，貨幣と交換されなければ意味が無い。

財・サービスがどれくらいの貨幣と交換出来るかを表したものが価格である。価格は，財の情報を表す。つまり，不足している財の価格は上昇し，余っている財の価格は低下する。この機能は生産量の決定において重要な働きを持つが，今日の資本主義経済では，価格は硬直する傾向がある。それは，産業が寡占化し価格支配力をもつとともに，財・サービスの過不足を価格以外の情報チャンネルから手に入れることが出来るようになったことにも一因があるだろう。

企業が生産をするのは，より多くの貨幣を手に入れるためであるが，今日の資本主義社会では，生産をしなくてもより多くの貨幣を手に入れることができる。いわゆるマネー・ゲームである。財・サービスの交換以外の貨幣の機能は色々あるが，貨幣自体の独自な運動が今日の資本主義社会の特徴の一つとしてある。

最後に資本主義社会の消費の特徴について述べる。

資本主義社会の消費の第一の，そして最大の特徴は，欲しいものが生産されるとは限らないところにある。様々な財・サービスが販売されているが，消費者が本当に欲しいもの，必要とするものはなかなかない。それは，生産者は，売れるであろう予想の下で財・サービスの生産を決定するから

である。消費者の要求を聞きながら生産するわけではない。例え聞いたとしても，利潤が上がらないようであれば，それを商品化することは難しい。

次に，必ずしも消費者が欲しいと思わないものを生産したとしても，それを売らなければならない。そのため，今日の資本主義社会では，広告の働きが大きくなっている。本当にいい商品は広告をしなくても売れていくが，そのような商品が一体どれくらいあるのだろうか。

労働者は大きくまとめてみれば，自分達が欲しいとも思わないような商品を無理矢理作らされて，欲しくもないのに，広告の力によって無理矢理買わされている。何とも哀しむべき存在である。

Ⅳ　豊かさとは，プロセスを進めるということである

以上述べたような独特な方法で，資本主義経済は，生産，交換，消費を日々繰り返している。そこで，実現されるべき豊かさとは一体何であろうか？

結論から言えば，プロセスを進めることである。プロセスを進めるとは，意識の深化と意識の進化を進めることである。意識の深化とは，無意識を意識化しセルフ・イメージを拡大することである。また，意識の進化とは，人が本来もっている潜在能力を現実化することである。人は，プロセスを進めることによって社会に貢献することができるし，またそうしなければならない。

人は様々な能力を潜在的にもっている。しかし，その能力の殆どは使われることなく多くの人々は一生を終わる。このことは，最近の脳や遺伝子の研究により段々明らかになってきている。

この本来もっている潜在能力を一日24時間，一年365日，常に現実化させるような生活を送り，プロセスを常に進め続けることこそ豊かな生活であるということが出来る。

多くの人々は，労働市場に出かけ，労働力を売り，そこで得た賃金で生

活に必要なものを購入し，それを消費する。それらを全て，プロセスを進めるように行うのである。

より具体的に言えば，まず，労働を選択するときに，自分が本当にやりたい仕事を選択する。自分が心の底から本当に創りたいと思うものを創り，共に働く人々との交流が深まっていくような仕事を選択するのである。本当にやりたい仕事を選択している人は，おそらく5％にも満たないだろうが，その原因の多くは，自分が本当にやりたいことが分からないところにあるのではないだろうか。学生の就職の相談をしていても，自分がやりたい仕事がわかってそれを目指して就職活動をし，就職していく学生は少ない。自分が目指すものがはっきりしないから，無駄に学生生活を送っている学生が多い。しかし，それがはっきりした学生は，よく勉強するし，何をするにも積極的になっていく。すると，実力もつくし，希望のところに就職することが出来る。だから，自分がやりたい仕事が何か分かるようになると，それに就ける人々はかなり増えると思われる。そのためには，幼児期からの家庭教育のありかたから検討しなければならない。

次に交換過程であるが，これは本当に必要とする財・サービスの情報を得るということが重要になる。その前に，本当に必要とするものが何かはっきりさせることが重要であるが。これは，消費にもかかわってくる問題である。今日の経済は情報が不足しているというよりも，情報が過剰であり，逆に，必要とする情報がどれなのか極めて分かりにくい。この氾濫する情報の中から自分が本当に必要とする情報を選びだす能力をつけることが重要になる。

最後に消費である。経済学の理論では，財の購入しか問題にしないが，購入した後の方がプロセスを進めるということに関しては重要である。財を使用することによって，本来の自己が持つ潜在能力が現実化しなければ，購入した財を十分活用したとは言えない。本当に必要とする最少限度のものを購入し，それを十分に活用し，使いきることが本来の消費の在り方である。使いきることにより，現在問題になっているゴミ問題も根本的に解

決することが出来る。

このように，労働，交換，消費の全ての過程においてプロセスを進めることが重要になってくる。この三つは相互に関連している。つまり，労働過程でプロセスを進めることができれば，消費過程でもプロセスを進めることがより容易になるのである。というのは，プロセスを進める労働をしていると，ストレスが溜まることがなく，自己本来の欲求が分かりやすいからである。自己本来の欲求が分かると，無駄なものを購入することが少ない。逆に，消費において，自己が本来必要とするものを購入し，それを活用していれば，自分が何をしたいかということが，よりはっきりしてくる。好きなもの嫌いなもの，必要とするもの必要としないものが直感的に分かるようになり，自分が何をすれば能力が十分に発揮出来るかも，直感的に分かるようになるのである。自己本来の労働，消費を行うことによって，自分に必要な情報を得る能力もまた高まってくる。このように，プロセスを進めることは，労働，交換，消費の全ての過程において相互に関連している。そして，一つの過程でプロセスが進むようになると，他の過程に於いてもそうなるのである。そして，生活の全てにおいてプロセスが進むようになると，生活が自分の思うように進み始めることになる。

以上，生産，交換，消費の過程でプロセスを進めることがどういうことかということについて述べてきたわけであるが，より具体的にプロセスを進めることについて述べてみよう。

まず，プロセスが進むと，欲求が高度化することがあげられる。マズローによれば，人間の欲求は五段階に分けられる。生存の欲求，安全の欲求，愛と所属の欲求，承認の欲求，自己実現の欲求である。プロセスが進んでいくと欲求が高度化し，自己実現の欲求で生きるようになる。現在の日本の大部分の人々は，生存の欲求と安全の欲求は満たされ，愛と所属の欲求と承認の欲求が満たされず，その結果，自己実現の欲求が満たされないと思われる。しかしながら，バブルが崩壊し，自分が本当に欲求している財を選択し始めたところをみると，自己実現欲求で生き始めた人々も増えて

きているのではないかと思われる。

また，プロセスが進むと健康になる。病気の原因は様々であるが，細菌やウイルスなどの病原菌が原因で起こる病気以外の病気の原因の大半は心に原因がある。ストレス，憎しみ，恨み，悲しみなどの悪感情をため込み，本来自分がやりたいこと，やるべきことを日常生活の中でやっていないから，気の巡りが悪くなり，病気になるのである。また，本来の自己で生きていると，身体に必要な食べ物が自然と分かるようになる。それは，感受性が高まることにより，身体に必要なものとそうでないものとを直感的に見分ける力がつくからである。

最後に，人間関係においては，愛せる人が拡大していく。人を嫌いになるということは，自分のもつ観念にあわない行動を人がとる場合か，自分で受け入れていない自分のある部分を，人に投影する場合が殆どである。プロセスが進むことによって，自分の観念に気付いたり，無意識に受け入れていない自分に気付きそれを受け入れることが出来るようになるため，愛せる人々が拡大していくのである。愛されたいという気持ちが徐々になくなり，愛するという気持ちが大きくなっていく。愛するという気持ちは大きくなるが，愛されるかというと必ずしもそうとは言えない。愛してくれる人が増える反面，憎む人もまた増えてくる。キリストははりつけになり殺されたし，釈迦も暗殺されようとした。全ての人を愛することは出来ても，全ての人から愛されることはないのである。

V　プロセスが進むと，自然も循環する

プロセスが進むにつれて，自分が本当に必要なものが分かるようになってくる。従って本当に必要なものしか購入しない。また，購入したものを完全に活用する様になるため，ゴミの量が極限まで少なくなる。さらに，出るゴミも，環境を破壊しないように，リサイクル出来る形態か，自然の力で分解出来るようなかたちでゴミとして出すため環境を破壊することが

少ない。

それは，プロセスが進むにつれて，集合無意識を意識化することが出来るようになるからである。集合無意識は，人類の共通の無意識でありまた，自然とも繋がっている。自然との繋がりを心と身体で感じることが出来るため，反自然的な行動は自然と少なくなるのである。

Ⅵ　プロセスを進めるために必要なものを富という

富とは，プロセスを進めるために必要なものをいう。ものが稀少であるか豊富であるか，物質的でるか非物質的であるかは問題にならない。価格はつかず豊富にある水や空気は生きるためになくてはならないものであるから，当然富になる。逆に，価格がついて市場で取り引きされるものは，購入し消費する人によって富になったりならなかったりする。従って，GDP を富の指標にすることは，当然出来なくなってくる。

プロセスを進めるということは，単に効用があるということではない。現代経済学の消費理論では，効用があるかどうかだけを問題にし，その中身を問わない。人を殺すためにナイフを購入しても，アルコール中毒の患者がお酒を買っても問題とはしない。効用があり，稀少であればそれは富になる。

しかし，このような定義では，社会の問題の解決の役には立たない。

プロセスを進める上では，人間関係が重要になってくる。人の欲求段階が高度化し，自己実現の欲求で生きるためには，愛と所属の欲求と承認の欲求を満たす必要がある。これらの欲求を満たす上で人の存在は良い意味でも悪い意味でも重要である。しかしながら，このことについては別の機会に考察することにする。

Ⅶ　富の分類

富の分類を始める前に，財・サービス等の分類をしておこう。

財・サービス等を分類するときには，次の図2のような分類が重要になる。豊かであるということはプロセスが進むということであり，財・サービス等はプロセスを進めることに役立ってこそ，富と言うことが出来る。従って，財・サービス等をただ所有しているだけでは富と言うことは出来ない。所有ではなく，使用するプロセスの分析が重要になってくる。労働については，賃金や労働時間の決定も重要であるが，それ以上に労働過程の分析が重要であり，消費に関しては，消費量の決定以上に消費過程，つまり購入した商品をどのように使用，処分するか，の分析が重要になってくる。

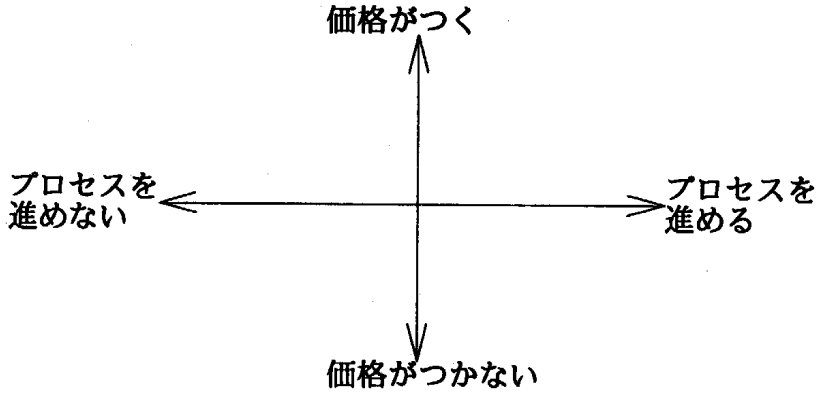

図2

財・サービスをこのように分類したときに，価格がつき，プロセスを進める財・サービスと価格がつかず，プロセスを進めない財・サービスはある意味で問題にならない。利潤をもとに生産の決定をする資本主義社会では，前者は生産され，後者は生産されないからである。もっとも生産されるためには，資本家が望む利潤をあげる必要があるが。

問題は，価格はつくがプロセスを進めない財・サービスが大量に生産さ

れ，価格はつかないがプロセスを進める財が破壊されるところに問題がある。前者は使用されなくなるとゴミとして捨てられるし，また生産するためにも大量の資源やエネルギーを消費し，大量の汚染物質を排出する。その裏で，プロセスを進めるために必要な自然が破壊されていく。価格がつかないために，その必要性が実感できないのである。

プロセスを進める財・サービスを富と定義したときに，それら次の三つに分類される。

第一の分類は，人類が生存していく以上，なくてはならないものである。

第二の分類は，人の集合無意識に働きかけ，人の感情を揺さぶり，生きる力を増大させるものである。

第三の分類は，使用する人によって，或は使い方によって，プロセスを進めたり，進めなかったりするものである。

第一の分類に入るものは，第一に自然である。自然がなければ人間は生存することが出来ない。土地，森林，水，空気はとりわけ重要である。これらをまとめて，自然ストックと呼ぼう。土地がなければ，人は住むことも，食糧を生産することも出来ない。森林がなくなれば，酸素の供給がとだえ，人は生きていくことが出来なくなる。水についても同様である。水に関しては，また，きれいで美味しい飲料水を確保することの他に，河川，湖沼，海をきれいなままに，生態系を破壊しないように保存することも重要になる。

第二は交通，通信網である。道路，電話線，光ファイバーケーブル等々がこの分類にはいる。生産された様々な物を輸送する手段は必要不可欠である。また，今後は，ソフト，情報の占める位置が高くなるので，通信網の整備も欠かせない。また，必要な情報を必要なときに得られるということも，プロセスを進める上では重要になる。

第三は食糧である。人間は食べないと生きていけないから。ただし，ここでいう食糧はまともな食べ物のことである。ここでいう食糧を食糧財と呼ぼう。野菜であれば，きちんとした有機農法等で栽培された，旬のその

土地でできたものである。そのような食べ物は栄養価が高いと共に，生命力に富み，日持ちもする。栄養価が高いと美味しいため，調味料の使用も少なくて済む。現在ではまともな食べ物が少なくなっている。添加物や農薬に汚染された食べ物が増えているのは問題がある。また，大量の食糧が輸入されているのも，農薬問題以外に，食糧は旬のものを，その土地で採れたものを食べるという原則に照らし合わせても，問題である。そういう意味では，温室栽培等で，無駄なエネルギーを消費し，栄養価の低い食糧を生産しているのも問題である。これは，そういう食べ物を要求する消費者の方にも，かなりの問題があると思われる。

この第一の分類の富に関しては，所有と生産の決定に関して，公的な手段を考える必要がある。土地を自然の生態系を破壊しないように利用することは，個人の私的な決定に任せていたのでは問題がある。また，本当に身体が必要とする食べ物を必要なだけ生産するのもそうである。計画をする場合には，すべてを中央集権的に決定するのではなく，可能な限り地方或は都市で分権的に決定するのが重要になる。なぜなら，全てを中央で計画するためには莫大な量の情報を処理しなければならず，そのため意志決定が遅れるか，硬直化するからである。小さければそれだけ状況の変化に対応した機敏な意志決定がなされやすい。

価格が付くかどうかということに関しては，土地に関しては，公的所有になるため，売買されない。従って，価格はつかない。ただし，民間に地代を払って貸し付けるということは行われるかもしれない。

食糧に関しては，価格が付いて取引きされる。ただし，身体にいい本来の食糧を生産するために，ある程度の所得保障は行われるかもしれない。

富の第二の分類に含まれるものには，芸術作品，宗教，書物がある。これらをまとめて芸術財と呼ぼう。芸術作品は，見るもの，聞くものに，生命力あふれる感動をあたえる。逆に言えば，人が本来もっている生きる力を刺激し，生きる感動を与えないような芸術は真の芸術とは言えない。

ここでいう宗教とは，本物の宗教である。大部分の宗教はドグマ化して

しまっているし，中には金儲けを目当てにしているのもある。そういうのはここでいう宗教にはもちろん含まれない。

書物については，古典として残っていくものがこの分類に含まれる。時代や地域を超えて，人類に普遍的な問題を扱った書物，或は，宇宙，自然の仕組み，法則に関して，新しい知見を加えた書物がそうである。これらの書物もある意味で芸術作品と言ってもいいかもしれない。

この第二の分類の富を理解するためには，人の感受性がかなり磨かれていなければならない。

この第二の分類の富に関しては，所有形態を公的な所有に変える必要がある。集合無意識を刺激するような芸術は，人類共通の財産であると考えることができる。そのような芸術は一般に公開しなければならない。また，そのような芸術作品を生み出せる人は，生活を公的に保証する必要もあるだろう。

富の第三の分類に含まれるものは次のものがある。それらをまとめて一般財と呼ぼう。

第一は住居である。人が生きていく上で住居の存在は不可欠である。

第二は衣料である。プロセスを進める上で，服装の選択は重要である。どのような服装を選ぶかによって，気持ちが変わり，生き方が変わってくる。

第三はその他生産される財・サービスである。現在市場で取引きされている多くのものはこの分類にはいる。これらの多くは，購入した人の使用法の如何によって富にもなれば，ゴミにもなる。従って，生産されたものを富として活用するためには，或は富になるものしか生産しないためには，次のことが必要になる。

第一に，消費者が自分のプロセスを進める財・サービスが何であるかを知ることである。財・サービスを購入するときに，何故それを購入しようとしているのか深く問いかけ，感じることが重要になる。

第二に，それらの財・サービスを企業その他に生産させることが必要に

なる。同一の商品を大量に消費するのであれば，共同組合をつくり，共同購入することで生産させるのは可能になろう。生産量が限られるようであれば，大量生産とは違う生産の仕組みを考える必要がある。ものによっては，職人が重要な役割を果たすことになる。本当に必要なものを生産させる力を消費者が持ったときに，単なる消費者を超えた消費者，つまり，prosumer[4]とでもいうべき存在になる。

このことを実現するためには，情報・通信・交通網を整備し，それらを消費者が十分に使いこなせることが必要になる。自分が必要とする財・サービスを生産出来る人が何処にいるか知らないことには，生産してもらうことは不可能になる。

第三分類の富を生産に関しては，私的な所有と私的な決定が原則となる。ただし，生産活動が生態系を破壊しないように一定の制約を受けることがある。

以上，分類された富について，所有と生産の決定をまとめてみれば，表1のようになる。

	自然ストック	交通・通信網	食糧財	芸術財	一般財
所有形態	公的	公的／私的	私的	公的	私的
生産決定	公的	公的／私的	公的／私的	私的	私的
価格	付かない	付く／付かない	付く	付く／付かない	付く

表1

4）prosumerとは，producerとconsumerとの合成語である。

Ⅷ　プロセスを進める消費をするために

豊かさを実現するためには，生産，交換，消費のそれぞれの過程でプロセスを進めていく以外に無い。ここでは，消費過程をプロセスを進める消費に変えていくことを考える。それは，労働過程を変化させるよりも簡単だからである。労働過程をプロセスを進める労働に変えていこうとすれば，組織的な変更を伴わなければならない場合も多く，変更するにはかなりのエネルギーを必要とする。それに比べて，消費を変更する場合は，個人の意識的な努力で解決される。

マルクスは，新しい社会の担い手として，労働者を考えていたが，筆者は，プロセスを進める消費を始め，prosumer として行動を始めた人々にその可能性があるのではないかと思っている。

プロセスを進める消費としてまず大切なことは，身体に必要な物を必要なだけ食べることである。高齢化社会を迎えた今日，最後まで健康であるということは，様々な意味で重要になってくる。死ぬときまで健康でいることによって回避される問題は沢山ある。医療費問題，年金問題，福祉問題等々。

健康な老いを迎えるためには，食の管理が重要である。世界的に日本食は見直されている。日本人の平均寿命が伸びている大きな原因は伝統的な日本食にあるという説もある。戦後様々な添加物混じりの食品が多くなり，それを食べている世代の平均寿命は伸びないという。

食事は，その土地でとれた旬の物を食べるのが原則になる。出来るだけ加工せず，生で食べる工夫が重要になる。それはなぜかと言えば，加工することによって，栄養素が破壊され，やわらかくなるからである。栄養素が破壊されると美味しくなくなるため，様々な調味料で味付けをしなければならなくなる。また，軟らかくなれば，噛む回数が減るため，あごの発達が悪くなる。噛むことは脳の発達とも関係し，顎の発達が悪くなれば歯

並びが悪くなり，噛み合わせ，虫歯等々の問題が生じる。きちんと噛むことは消化の基本である。それがうまくいかないと健康を害することになる。

また，食にはただ単に栄養をとるだけでなく，コミュニケーションをとるという重要な働きがある。一人で食事をするのではなく，家族で或は仲間で食事をすることは，愛と所属の欲求を満たすうえで重要である。物的に基本的な財は，持ち家を除けば，今日の日本では，ほぼ満たされている。このような状態では，愛と所属の欲求を満たすことと承認の欲求を満たすことが重要になる。そのための手段として，共に食事をし，コミュニケーションを図ることは重要である。

主食を除き，その土地で採れた旬のものを食べる。もちろん農薬や化学肥料は極力抑えられている。そして，家族や心地よい仲間との豊かなコミュニケーションを図りながら食事をする。このことが満たされる経済システムを創るだけでも，かなり豊かな社会が実現出来るのではないだろうか。

また，人間には本来，自分の身体に必要な栄養素を直感的に知ることができる能力が備わっている。だから，本来は，自分が食べたい物を食べていれば，問題は無いはずである。旬のものとは，季節が変わり，身体が必要とする食べ物である。季節が変わるたびに，自然は，身体が必要とするものを用意してくれる。だからきちんとした食べ物を，よく噛んで，コミュニケーションを十分とりながら食事をしていれば，本来病気にはならないはずであるが，身体の調子がおかしくなれば，栄養学やバイディジタルOリングテストなどの利用も必要になるであろう。食事を正しくするだけで，治っていく病気はかなりある。

次に重要なのは，財・サービスを購入することではなくて，不必要な物を処分することである。多くの家庭で要らないもの，使用しない物が眠っている。それは，リサイクルに回すなり，ゴミとして出すなどして，処分することである。それは何故かと言えば，必要な物と不必要なものの両方を所有していると，それらの区別が直感的に出来にくくなるからである。そうなると，不必要な物を購入することが多くなる。環境を守るためにま

ず第一にやらなければならないことは，不必要なものを購入しないことである。不必要な物を購入するためには，それだけのお金が必要となるし，そのためには余分に働かなくてはならない。また，不必要なものを生産するためには，その分，資源やエネルギーを浪費してしまう。有害な廃棄物も排出される。また，購入した物は，活用されないためゴミとして処分される。また，活用しない物が多いと，いざというとき，必要な物がどこにあるか分からず，結局購入してしまうことも多い。さらに，不必要な物が多いとそれだけで身体が疲れるのである。何もないと，すっきりしていて，気持ちいいし，身体も楽である。

このように，不必要なものを購入しないで解決出来る問題は多いが，問題は，資本主義のシステムと基本的に矛盾することである。システムを変えないと，需要不足で失業者が増大することになる。規格化された商品の大量生産・大量販売から，個性的な商品の少量生産・少量販売のシステムに変えていく必要がある。付加価値の高い商品を生産することが重要になる。情報のネットワーク化が進めば，注文がとだえることは少なくなるだろう。

余分なものを捨ててしまったら，本当に自分が必要なものを知り，それを購入し活用することである。そのためには，人間が本来生まれながらにして持っている感覚を蘇らせる必要がある。感受性を高める訓練等心理学，身体技法の様々なテクニックが有効になる。自分が本当に必要なものがわかったら，それを手にいれていけばいい。それが市場で販売されている商品であれば，購入するだけであるから簡単であるが，そうでない場合は，手に入れるための行動にかなりのエネルギーを必要とする。個人で行っていたら，挫折する場合もある。そういう場合は，プロセスを進める消費者とのネットワークを創ることが重要になる。単に消費するだけでなく，何か新しいものを創り始めたとき，prosumer として行動することになる。

Ⅸ　まとめと今後の課題

本稿では，新しい富の概念と豊かさについて考察してきた。豊かさとは，プロセスを進めることであり，富とは，プロセスを進めるために必要なものである。それは，物質的であるか非物質的であるか問わないし，また，価格が付くか付かないかも問わない。

このように富を定義したときに，富みは三つに分類される。第一の分類は，自然等生きていくために欠くことの出来ないものであり，さらに，自然ストック，交通・通信網，食糧財に分類される。第二の分類は，芸術等人の集合無意識に働きかけ，人の生きる力を呼び覚ますものである。そして第三の分類は，使用する人により，また使用方法によって，富になったりならなかったりするものである。

これら五種類の富は，本来，所有と生産決定の在り方が異なるものであり，従って，市場での取引きに適するものと，そうでないものとがある。本稿では，この事についてある程度の考察を試みたが，もう少し深く，このことについて考察する必要がある。

豊かな生活とはプロセスを進める生活であるが，とりわけ消費においてプロセスを進める必要がある。そこでは，不必要な物を処分し，本当に必要なものだけを購入し，購入したものを徹底的に活用することが重要になる。そのためには，感受性を高め，自分が必要とするものを知る必要がある。そのための技法を整理し，不足するならば，新たに開発する必要がある。この事に関しては，また，乳幼児期からの教育についても深く考察をしなければならない。

また，プロセスを進めるために考察しなければならない重要なものに，貨幣がある。貨幣には通常，交換機能，富の貯蓄機能といったものが経済学では説明されているが，その他にも象徴機能，権力機能といったものもある。それらの機能がプロセスを進めるうえで，どのような役割を果たし

ているか考察することは，是非とも必要なことである。

そして，最後に，消費者を超えたprosumerのネットワークの展開についても理論面，実践面から考察を深める必要がある。

引用文献

(1) アダム・スミス著，大内兵衛，松川七郎訳，「諸国民の富（三）」，1965年。
(2) レオン・ワルラス著，久竹雅夫訳，「純粋経済学要論」，岩波書店，1983年。